

青春の筆跡

書道パフォーマンス甲子園

高校生企画員リポート ■ 1

紙のまち四国中央市を舞台とした第12回全国高校書道パフォーマンス選手権大会(書道パフォーマンス甲子園)が8月4日、いよいよ開催される。大会を盛り上げようと、実行委員会が募った「企画員」と呼ばれるボランティア53人は地元の高校生たちだ。選手歓迎、アトラクションなど五つの班に分かれて活動している。広報を担当するPR班の企画員に、大会運営の様子をリポートしてもらう。

企画員の始動は2018年12月。最初に取り組んだのは、大会のキャッチコピーだった。企画員が考えた案を基に、53人全員で協議し「結んだ絆 今こそ光れ この夏に懸ける 熱き青春」に決定した。

発案者は三島高3年の保田音萌(おとめ)さん(17)。思いついた20のフレーズから選択し、組み合わせたという。締めくくりの「青春」という一語はどうしても外せなかった。「選手が一生に一度の青春を謳歌(おつか)し、心に焼きつ

く大会になってほしい」と語った。

青春は一度きり。三島高2年藤井虎太郎さん(16)が考案したポスターデザインにも同じ思いが込められている。ポイントは選手の背中に配した水引を「結びきり」という形にしたところ。結婚祝いなど「一度だけの祝い事」に使われる結びだ。大会は継続していくものだが、選手たちにとっては一年一年が勝負なのだ。

情報発信のためのアイテムも高校生のアイデアが形になっていく。三島高2年高橋幸弥さん(16)のパンフレットデザインは、本番を控える選手の緊張感を多重線で表現した。

スタッフが着用するTシャツには、PRテーマである「結」という文字をプリント。三島高3年三好那侖さん(17)が「口」という部



大会ポスターやキャッチフレーズを考案した三島高生



坂上すずさん

さかうえ・すず 2001年生まれ、三島西中学校卒。三島高校ではソフトテニス部。音楽鑑賞とカラオケが趣味で好きな歌はBTS(防弾少年団)の「27/31」。

分が大会回数の「12」のように見える書体で記した。同じく3年の山内天音さん(17)は、腹部に4種類の和柄を配し、書道が持つイメージを印象づけた。

保田さんは改元になぞらえ「伝統を引き継ぎながら新しい物語の始まりとなればよい」と期待する。節目の年の大舞台。準備は着々と進む。(文と写真・三島高3年坂上すず)

「一度きり」思い表現

書道パフォーマンス甲子園は、愛媛新聞の取材班が準備状況から随時、ツイッターで紹介しています。アカウントは@ehime_np_shodoly.jp。